



日々歩

hibiho
ひびほ



がんをこえて、ともに歩む

季刊 No.25 / 2019 Autumn

がんを学ぼう「教えて!ドクター」

がん遺伝子パネル検査で“次の治療薬”を探索
(中央病院 先端医療科)

がんプロフェッショナルたち
臨床検査技師

あなたを支えるチーム医療の輪
気になる症状が出たら、早めにSOS発信を

「がんと生きる」を支えます!
治療に向かう力の源、食事を支える「栄養相談」

MICAO

「がん遺伝子パネル検査」 保険適用始まる

当センターが開発に携わったがん遺伝子パネル検査「OncoGuide（オンコガイド）NCC オンコパネルシステム」が2019年6月より保険診療の対象となりました。がん遺伝子パネル検査で、一度に多くの遺伝子の変異を網羅的に調べ、治療につながる遺伝子異常が見つかった場合は薬剤の投与が可能になります（本号4～5ページ）。使用する薬剤は、既に保険適用されている、または治験などの臨床試験として行われているものが対象となります。中央病院では、患者さんに適した薬剤投与の機会を増やすべく、患者申出療養制度を利用した、既承認薬を適応外使用できる臨床研究も10月より開始しました。詳しくはホームページをご覧ください。主治医とよくご相談ください。

東病院に 新たに2名の科長が就任

皆さまこんにちは。この度、新しく東病院乳腺外科長を拝命いたしました大西達也と申します。当センターには毎日多数のがん患者さんが来院されますが、より多くのがん患者さんにより最適な診療を提供できるよう、チーム一丸で頑張っております。



東病院 乳腺外科長
大西達也

8月より東病院食道外科長に就任いたしました藤田武郎です。ピッツバーグ大、岡山大学を経て当院で12年になります。この間、食道外科は創世記・黎明期を経て、現在は有数の鏡視下手術施設となりました。食道がん治療は、他臓器がんと比較して、多職種との連携した対応が特に重要で、退院後の中長期的支援も必要です。手術治療とケア部門領域に関し臨床・研究を進めてゆくよう努力いたします。



東病院 食道外科長
藤田武郎

「ブラック・ジャック セミナー」を開催

中央病院で8月24日に外科手術体験「ブラック・ジャック セミナー」（協力：ジョンソン・エンド・ジョンソン株式会社）を開催し、小学5年生から中学3年生までの64名が参加しました。子どもたちは、国内での肺がん手術件数最多実績を持つ中央病院呼吸器外科の医師らの指導を受けながら、超音波メスなどの最新医療機器を用いた手術体験に挑戦しました。当センターは、セミナーを通じて外科医や医療者を志す子どもたちが増えることを願い、これからの日本のがん医療を支える人材育成に貢献していきたいと考えます。



中央病院小児病棟 縁日でにぎわう



8月21日、中央病院小児病棟で「縁日」を開催し、治療中のお子さんや保護者の方々ににぎわいました。一日限りの夏祭り仕様に飾られた会場では、病棟スタッフから焼きそばやフランクフルト、かき氷などがふるまわれ、参加者の皆さんはヨーヨーすくいやスイカ割りなど、夏ならではのイベントを楽しみました。

《目次》

■ News & Topics	2
■ がんプロフェッショナルたち	3
東病院 病理・臨床検査科	
がんゲノム医療の一翼を担う臨床検査技師たち	

■ がんを学ぼう【教えて！ドクター】	4
がん遺伝子パネル検査で“次の治療薬”を探索	
中央病院 先端医療科	
■ あなたを支えるチーム医療の輪	6
vol.6 気になる症状が出たら、早めにSOS発信を	

■ 「がんと生きる」を支えます！	7
vol.7 治療に向かう力の源、食事を支える「栄養相談」	
■ NCC INFORMATION	8
こちら薬剤部 「薬剤師外来」で不安・疑問の解消を	

遺伝子パネル検査に適した検体を作製 次世代の検査法開発への貢献も

100個以上の遺伝子異常の有無を、次世代シーケンサー（NGS）で一度に調べる「がん遺伝子パネル検査」が、今年6月から一部保険適用になりました。その一翼を担う臨床検査技師の中村信之さんと説田愛弓さんに話を聞きました。

—がん遺伝子パネル検査における臨床検査技師の役割とは？

中村 がん遺伝子パネル検査は、手術や生検によって採取した組織を用いて、遺伝子異常の有無を分析し、最適な治療法を探すための検査です。私たち臨床検査技師は、手術や生検で採取された組織検体を準備して検査会社へ分析を依頼するまでの、遺伝子パネル検査の入口の部分を担当しています。

手術や生検で採取した組織は、まず、パラフィン（ロウの一種）で固めます。次に、パラフィンで覆われた組織を薄くスライスする「^{はくせつ}薄切」と呼ばれる作業を行い、スライドガラスに貼りつけ、検査会社へ送る検体を作製します。遺伝子パネル

検査では、数年前に採取して保存していた組織を使うこともあるので、精度管理を徹底し、常に質の高い検体を作るよう日々努力しています。

説田 がん遺伝子パネル検査は、検査会社に検体を送ってから患者さんに結果を伝えるまでに4～6週間かかります。検査に適した検体が揃わなければ、さらに時間がかかってしまいます。病理医と患者さんの担当医師の間に入ってコミュニケーションを取り、できるだけ早く検体を準備して、遺伝子パネル検査が円滑に進むようにするのも臨床検査技師の役割の一つです。

—検査会社から来た結果をどう解釈するか検討するエキスパートパネル（専門家会議）にも参加しているのですか。

中村 はい。私たちを含め、主に遺伝子パネル検査関連の業務を担当している臨床検査技師3人がエキスパートパネルに参加しています。遺伝子パネル検査の結果を出す出口の部分まで見届け、臨床検査技師としての業務の改善にもつながっていきたいと考えています。

—説田さんはがんゲノム医療コーディネーターでもあります。その役割について教えてください。

説田 患者さんが遺伝子パネル検査を受けるかどうかを決める段階と、結果について医師の説明を受ける際に同席し、その後、補助説明をしたり質問に答えたりしています。

がんゲノム医療コーディネーターとして患者さんに接するようになってから、



がんゲノム医療コーディネーターとしても患者さんをサポートする説田愛弓さん

検体を準備する際にも、遺伝子パネル検査で結果が出やすい検体を作製するために、もっとよい方法がないか考えるようになりました。遺伝子パネル検査では腫瘍細胞の割合が高い検体が求められますが、どんな工夫をすれば、より検査に適した検体ができるのか、病理医や臨床医と話し合うこともあります。患者さんがつらい思いをされて採取した組織なので、最もよい状態で検査にかけられるように支援していきたいです。

—やりがいを感じるのはどのようなときですか。

中村 質の高い検査や最適な治療を提供するとともに、新しい検査法や治療法を開発するのが当センターの使命です。個人的には、新たな検査の開発につながる臨床研究に関われることにやりがいを感じます。日々作製している病理検体が、未来の検査に使われる可能性もあります。患者さんの期待に応え、精度の高い検査実施に貢献したいです。



遺伝子検査主任で、認定臨床染色体遺伝子検査師の資格も持つ中村信之さん

がん遺伝子パネル検査で“次の治療薬”を探索

がんの組織を用いて遺伝子異常の有無を調べ、一人ひとりの患者さんに合った治療法を選択する「がんゲノム医療」が広がってきています。がんゲノム医療と、保険診療で実施されるようになった「がん遺伝子パネル検査」について、中央病院副院長で先端医療科長の山本昇医師に聞きました。

「次世代シーケンサー」で 多数の遺伝子異常を同時解析

がんゲノム医療は、手術や生検で採取したがんの組織（腫瘍のかたまり）を用いて、がんの増殖に関わる特徴的な遺伝子異常を調べ、一人ひとりの患者さんに最適な治療法を選択する究極の「個別化医療」です。すでに、肺がんや乳がんなどでは、保険適用となっている特定の薬の効果を調べる遺伝子検査（後述するコンパニオン検査）が、日常診療の中で行われています。また、乳がんに多い遺伝子異常が、胃がんや肺がんにも見られるなど、臓器横断的に見つかる場合があることもわかってきました。

今年6月には、「次世代シーケンサー（NGS）」という高性能の遺伝子解析装置を用いて、多数の遺伝子異常を同時に測定する「がん遺伝子パネル検査」が保険適用になりました。少し専門的になりますが、がん遺伝子パネル検査には、特定の保険適用薬の効果を調べる「コンパニオン検査」と、保険適用薬以外の薬を含めて“次の薬物療法”を探索する「がんゲノムプロファイリング検査」があります。現在、保険収載されているがんゲノムプロファイリング検査は「OncoGuide（オンコガイド）NCCオンコパネル」（右図参照）と「FoundationOne（ファンデーションワン）CDxがんゲノムプロファイル」の2種類で、前者は114個、後者は324個の遺伝子を一度に調べることができます。

NCCオンコパネルは、当センターが中心となって開発した遺伝子診断パネル検査です。同時に血液の検査も行い、がんの組織と正常組織（血液）とを比較することにより、正確性を高めています。

2種類のプロファイリング検査が保険診療の対象となるのは、標準治療が「ない」「終了になった」または「終了が見込まれる」、「固形がん」の患者さんです。固形がんとは、臓器や組織でかたまりをつくる、「血液がん以外のがん」です。もとも標準治療が確立していない「希少がん」の場合は、それより早い段階で検査を受けられる可能性があります。

「検査を受ける利点があるか」は 担当医と相談を

がん遺伝子パネル検査が受けられるのは、中央病院と東病院を含む「がんゲノム医療中核拠点病院」（以下、中核拠点病院）11施設^{*1}と、「がんゲノム医療連携病院」156施設です。他の病院で治療を受けている方が、中央病院や東病院で検査を受ける場合には、紹介状が必要です。対象になるかどうかは、がん種や全身状態などによっても異なりますので、まずはご自分の担当医に相談してください。

検査に用いるがんの組織は、一般的に、3年以内に採取されたものが適しているとされます。保存されていたものを用いることが多いのですが、組織の量が少ない場合や、古い場合には再度、採取



中央病院副院長・先端医療科長
山本 昇 医師

やまもと・のぼる／1991年広島大学医学部卒業。国立がん研究センター中央病院呼吸器内科・医員などを経て、2013年より同院先端医療科長、19年より臨床研究支援部門長、副院長（研究担当）。「新薬の開発を促進し、がん遺伝子パネル検査の結果が治療につながる患者さんを増やしたいです」

が必要になることがあります。

検査にかかる費用の自己負担額は、1割負担の人で5万6000円、2割負担で11万2000円、3割負担では16万8000円です。所得によっては、高額療養費制度を使って自己負担額を減らすことができます。

次世代シーケンサーを使った遺伝子の解析は検査会社で行い、その結果はレポートとして中核拠点病院へ返却されます。中核拠点病院ではエキスパートパネル（専門家会議）が開かれ、解析結果の意義づけや、推奨される治療薬の提案が行われます。検査結果は、新薬開発のための重要なデータベースになるため、検査を受ける患者さんには、「がんゲノム情報管理センター（C-CAT）」への登録をお願いしています。登録に同意された患

者さんに関しては、国内の治験情報などを記載した「C-CAT調査報告書」が作成され、この報告書もエキスパートパネルの参考資料となります。

患者さんへの結果説明は、担当医が行います。検査を受けることに同意してから結果が出るまでには、約4週間かかります。

治療につながる患者さんは10～15%とまだ限定的

がん遺伝子パネル検査を100人の患者さんに行った場合、約80人にがんに関係した遺伝子異常が見られます。そのうち、治療につながるかもしれない“意味のある”異常が見つかるのは50人くらいです。ただし、すべての遺伝子異常に対応する薬が揃っているわけではないですし、患者さんの体調によっては薬物療法ができないこともあります。そのため、実際に、治療が行われた患者さんは全体の10～15%と限定的です。

治療につながる異常が見つかった場合の主な選択肢は、①現在開発中の新薬の治験に入る、②自分のがんでは保険適用外だが他のがん種では承認されている薬の使用を検討する——の2つです。「治験はあるけれども、その適格基準を

満たせないために参加できない」または「保険適用外の薬を使用したい」患者さんについては、「患者申出療養」という制度を使って治療が受けられるように、準備を進めているところです。

先端医療科では、同科で実施中の治療（第1相試験）の中から、患者さんの条件に合うものを探せる検索システムを構築し、ホームページ上に公開しています。「患者さん向け※2」と「医療関係者向け」の2つのサイトがあり、がん種、治療状況、遺伝子異常、年齢などの条件を入力すると、それに合った治験情報が得られます。是非、ご活用ください。

遺伝子異常に合わせた治療を受けた患者さんの中には、劇的にがんが小さくなる方がいる一方、効果が得られない方もいます。また、治療につながる遺伝子異常が見つからなかったとしても、そこで治療が終わるわけではなく、別の治療や治療法を選択肢の一つとして紹介することも少なくありません。検査結果がすべてではないことも強調しておきたいと思います。

遺伝子パネル検査で見つかる遺伝子異常は、ほとんどが後天的なものです。が、生まれつき持っている「家族性腫瘍に関連した遺伝子異常」が見つかること

があります。そのため検査を行う際には、事前に、そういった異常が見つかった場合に伝えてほしいかどうか確認し、必要に応じて「遺伝相談外来」や「遺伝カウンセリング」の受診をお勧めしています。

「新薬開発」「遺伝子解析の専門家育成」が課題

前述したように、がん遺伝子パネル検査には「まだ個々の遺伝子異常に対応する薬が揃っておらず、治療につながる患者さんが少ない」という課題があります。新薬の開発は先端医療科に限らず、当センター全体の使命です。最適な治療薬が見つかる患者さんを増やすためにも、製薬会社と協力しながら、さらに開発を進めることが重要だと考えています。また、「遺伝子解析の専門家が不足している」現状を踏まえ、今後は教育にも力を入れ、全国の患者さんが、身近な病院で気軽にがん遺伝子パネル検査を受けられる環境を整えていきたいです。

※1 2019年9月に指定された「がんゲノム医療拠点病院」も中核拠点病院に準じた機能を持つ予定

※2 中央病院先端医療科で実施中の治療（第1相試験）を、がん種などの条件設定により検索できる患者さん向けのサイト

<https://phase1-oncol.ncc.go.jp/patient/search-patient/>



気になる症状が出たら、早めにSOS発信を

放射線治療は、基本的に通院治療であり、皮膚炎や粘膜炎など治療による有害事象（副作用）を軽減するためには、患者さん自身のセルフケアと、症状が出たら早めに医療者に伝えることが重要になります。放射線治療中は、どんなときにSOSを出したらよいのでしょうか。東病院看護部・がん放射線療法看護認定看護師の中盛祐子さんが解説します。

放射線治療看護外来が窓口

放射線療法は、手術と薬物療法と並び、がんの三大治療の一つです。放射線は一度に大量に照射できないため、平日は毎日、数週間～2カ月程度通院して治療を受けることになります。

照射量や部位、当て方によって症状や重症度は異なりますが、放射線治療中は、ほとんどの患者さんに、急性期の有害事象（副作用）が生じます。

放射線治療のために毎日通院するのは大変ですが、頻繁に放射線技師や外来看護師と顔を合わせるのを利点と考え、これまでと違う症状が出ているときやケアの仕方がわからないときには、躊躇

せず医療者にSOSを発信してください。早い段階で適切に対処することにより、副作用の程度を軽くすることができます。

東病院では、今年6月に「放射線治療看護外来」を開設し、がん放射線療法看護認定看護師が患者さんに、副作用の症状と出現時期、その対処法を説明したり、治療中の困りごとやケアの相談に応じたりしています。

放射線治療を受ける患者さんには、初診時、総線量が40グレイ（Gy）を超えたとき、放射線治療終了時にこの看護外来を受診していただきます。放射線治療の副作用で困っている患者さんにも放射線治療看護外来をご案内し、つらい症状を軽減して最後まで治療が続けられるように支援しています。



「不安や心配事があつたらため込まず、何でも相談してください」（中盛祐子看護師）

腔内の衛生を保つことが大切です。痛みに対しては、痛み止めを使用し症状の軽減を目指します。

食道がん、肺がんの放射線治療では食道の粘膜が炎症を起こして、痛みや食事のつかえ感が出ます。一方、直腸がんの治療では、肛門周辺が炎症を起こして排便や歩行の際に強い痛みを生じることがあります。いずれも早く対処すれば、痛みやつらさは軽減できます。気になる症状が表れたら医師や看護師に伝えましょう。

治療中は全身状態を保つために栄養管理も重要です。食事量が減ってきたら相談してください。原因に応じて、食事の工夫についてお伝えします。

治療中の不安やつらい症状を少しでも和らげ、治療を完遂できるように、患者さんひとりひとりの生活スタイルに寄り添ったケアを提供していきたいです。

放射線治療の完遂のためにも看護外来活用を



東病院放射線治療科
茂木 厚医師

患者さんの生活の質を保ちつつ治療を完遂するためにも、副作用の症状を軽減する支持療法が重要です。患者さんは、看護師には本音を言いやすい場合があるのではないでしょう

か。患者さんの本音の部分を放射線治療チームで情報共有し、私たち医師もひとりひとりの患者さんに合ったきめ細やかな治療や説明をしていきたいと考えています。放射線治療看護外来を設置したことで、より看護師に相談しやすい環境が整い、患者さんの不安やつらい症状の軽減につながることを期待しています。

早めの対処で、痛みやつらさを軽減

副作用の出方には個人差がありますが、一般的には、放射線治療開始2週間後くらいから照射部位の皮膚が赤くなってヒリヒリする皮膚炎が生じます。炎症の程度は照射方法、部位によっても異なりますが、治療期間中に照射した放射線の総線量が多いほど痛みや乾燥、炎症などが強く出やすくなります。

頭頸部がん治療の場合は、皮膚炎のほかに、口内炎、唾液の分泌低下による口腔内の乾燥、味覚障害などが生じます。放射線治療中は1日5～8回のうがいを習慣化し、口の中の乾燥を防ぎ、口

「がんと生きる」を
支えます!

中央病院・患者サポートセンターへようこそ vol.7

治療に向かう力の源、食事を支える「栄養相談」

中央病院の患者サポートセンターでは、平日は毎日、管理栄養士が、外来の患者さんを対象にした栄養相談を行っています。また、水曜日の13時半から30分間、外来栄養教室も実施しています。どのような相談が多いのか、主任栄養士(管理栄養士)の阿部寛子さんに聞きました。

がん治療中の食事に悩んだら

—栄養相談とは?

がんの症状や治療による副作用、治療の影響で発症した病気などのために、食事が思うように摂れなくなったり栄養状態が悪くなったりしている患者さんは少なくありません。そのような患者さんに対し、管理栄養士が、食事の摂り方や日常生活の中で無理なく栄養状態を改善するコツなどを提案する場が「栄養相談」です。患者サポートセンターでの栄養相談は、外来の患者さんが対象です。

—どのような相談が多いのですか?

最も多いのは、消化管の手術前後の患者さんからの相談です。食道がんの患者さんの場合は、手術の前から食事があまり摂れなくなっていることも多いので、何を、どれくらい食べているか確認し、食べられそうなものを一緒に考え、栄養を摂る工夫の仕方を提案します。手術後も定期的に來ていただき、1回の食事量や栄養バランスなどを指導します。必要に応じて体構成成分分析により筋肉量や体脂肪量の変化を評価して栄養相談に用いています。

また、薬物療法中や放射線療法中の患者さんに多いのは、吐き気や口内炎、

味覚異常などの副作用があって、食事が摂れないという相談です。状況は一人ひとり違うため、症状や体調に合わせて、食べやすい味付けや、きざみ・とろみなど調理の工夫もお伝えしています。無理なく栄養が摂れる市販の栄養補助食品を紹介することもあります。

患者さんの中には、手術の影響や薬の副作用などによって、糖尿病や腎機能障害になる方もいます。その場合は、治療に合わせた食事の注意点や、具体的な食事方法をアドバイスしています。

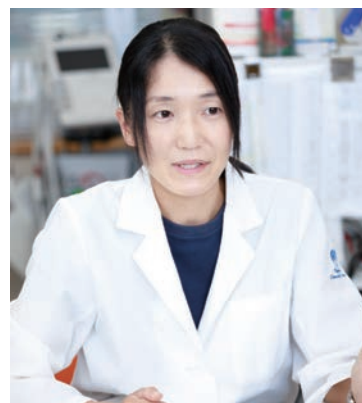
まずは担当医を通して相談を

—相談には予約が必要ですか?

基本的には、担当医の先生からの予約が必要です。事前に患者さんの状態がわかっていれば、きめ細かいアドバイスができるからです。食事や栄養についての相談をご希望の方は、まず担当医にご相談ください。また、些細な相談であれば、週に一度開催している「外来栄養教室」は、予約不要で気軽にご利用いただけると思います。

—外来栄養教室とは何ですか?

水曜日の13時半～14時の30分間ですが、がん治療中の食事の摂り方や、治療の副作用などがあるときの食事の相談に応じています。教室といっても講



栄養管理室・主任栄養士(管理栄養士)の
阿部寛子さん

義をするわけではなく、誰でも気軽に食事について相談できる場としてご活用いただいています。入院中の患者さんのご家族が参加されて、退院後の食事について相談されることもあります。

嗜好や生活スタイルに合わせて

—患者さんに接するうえで、心がけていることは?

食事に対する考え方や食べ物の好みは個別的なものですから、一人ひとりの嗜好や生活スタイルを尊重しながら、提案・助言するようにしています。食事は人生の大きな楽しみの一つですし、栄養状態が悪いと治療が続けられなくなることもあります。食事に関することなら、どんな些細な悩みでも遠慮なくご相談ください。



食品サンプルを使って、1回分の食事量や栄養バランスのよい食べ方などをアドバイスすることもある

「患者サポートセンター」をご活用ください

中央病院8階にあり、さまざまな職種の専門家が患者さんとご家族の相談に応じる他、各種の患者教室も開催しています。

■利用時間 月～金曜 9時～16時

■一部のプログラムは要予約



当センターへのご支援、厚く御礼申し上げます。今後ともますますのご支援を賜りますようお願い申し上げます。
お預かりした寄付金は、プロジェクト寄付、または、がん研究・がん医療の発展のため、大切に使用させていただきます。

54,326,514円 319件
(2019年度累計 2019年8月31日現在)

寄付者ご芳名 (敬称略/掲載ご希望者のみ)

■がん研究・がん医療のための寄付 (使途を指定しない寄付)

株式会社東和プロセス Tantiwivat Jeerayoo 吉武秀人
福田良策 浅川智幸 株式会社カラーエンタープライズ
清水淳一 株式会社DropStone
有限会社ガッツ 代表取締役 山本博 小室忠雄 苅米喜之
栗林津多子 橋本博光 内野一成 水越和治 中野愛子
坂田智男 中村ヒロ 古口豊 河美紀 小縣久彦
株式会社RePLAY 山田友恵 佐藤文雄 三澤幸子
二瓶幸子 大澤早苗 小柳里子 田中正人 藤城光一
岩本百合子 田窪千博 奥野公子 奥山謙二 関口節子
山田拓 天間邦子 田口博一 丸崎光彦 須藤百合子
橋川力三 高橋忠世

■プロジェクト寄付 (使途指定寄付)

□NEXT 真能玲子 藤森千晴 櫻井正義 宮本林治郎
崎村浩一 小柳里子 古川晴紀 田口博一
□患者サポートセンター 竹内和規
□SCRUM-Japan 小宮山都太郎
□Endeavor 福川大和 齋藤野雅美 佐々木洋 北谷知己
□届けるを贈る 届けるを支える『がん情報ギフト』
岡田隆 住友生命保険相互会社 内田哲也

■物品のご寄付

株式会社資生堂 辻元淑子・安良明子 Studio703 堀野尚美
(2019年6月1日～8月31日)

がん患者さんとご家族のためのくらし(法律・税金)の相談

がん患者さんとご家族のための法律と税に関する相談。弁護士・税理士が、お話を聞かせて、問題点を整理、助言を行います。(無料・予約制)

[詳しくはこちら](#)

■ご寄付について WEBサイトはこちら

がん研究センター 寄付 検索

■詳しくは寄付担当まで

中央病院 03-3547-5201(内線2359・2240)
E-mail: nckifu@ncc.go.jp
東 病 院 04-7133-1111(内線91460・2343)
E-mail: kifu@east.ncc.go.jp



こちら薬剤部

「薬剤師外来」で不安・疑問の解消を 飲み薬の抗がん薬を安全に服用していただくために

「抗がん薬」と聞くと、注射薬を思い浮かべるかもしれませんが、最近は飲み薬のみで治療する患者さんが増えています。中央病院 8 階の患者サポートセンターでは、自宅で抗がん薬を服用する患者さんのために、薬剤師が服薬指導や副作用相談などを行う「薬剤師外来」を開設しています。初回は担当医からの依頼を受けて実施し、抗がん薬はもちろんのこと、副作用を抑える薬(支持療法薬)を含め、使用するすべての薬の説明を行います。持病の薬との飲み合わせ、緊急時の連絡方法なども確認します。

2 回目以降は、薬を飲み始めてから実際にどのような副作用が出ているか、使いにくい薬はないかなどを丁寧に聞き取り、改善策と一緒に考えるフォローアップが中心です。副作用で多いのは、吐き気、便秘、下痢、倦怠感、味覚異常などですが、手足症候群といって、手や足の皮膚に水

疱ができたり痛みが出たりすることもあります。皮膚症状の緩和・予防には保湿が有効です。男性患者さんの場合は保湿剤を塗る習慣がない方も多いため、1 回に塗る量や 1 日の回数などを具体的に伝えるようにしています。その他、血圧や甲状腺機能などに影響が出る抗がん薬もあり、血液検査の数値も注視しています。

患者さんが医師の説明に同意し、納得して治療を受けることを「インフォームド・コンセント」といいますが、近年はそれを一歩進めた「アドヒアランス」という考え方が広がっています。これは、「患者さん自身が積極的に治療に参加すること」を意味する言葉です。薬の飲み忘れを防いだり、副作用を軽減したりするために、どのような工夫ができるのか、一緒に考え、治療を進めていきましょう。そのために、薬剤師外来を大いに活用していただきたいと思います。

副作用を抑える工夫などを一緒に考え、治療を乗り越えましょう
中央病院薬剤部・阿部健太郎

薬剤師外来の利用の流れ

①初回(経口抗がん薬治療開始時)

担当医(経口抗がん薬・支持療法薬の処方)

↓ 依頼

薬剤師外来

- 患者情報収集、診察や処方内容の確認
- 服薬指導 ●次回薬剤師外来の予約 など

↓

- 電話によるフォローアップ(必要時)

②2回目以降(外来診察前)

薬剤師外来

- 前回診察後の情報確認 ●服薬状況・副作用の確認
- 副作用対策立案 ●担当医への情報提供・処方提案 など

↓

担当医(診察)

看護師(皮膚障害のケア、看護サポート)

※薬剤師外来の利用には原則として予約が必要です。担当医や看護師にご相談ください。



国立研究開発法人
国立がん研究センター
National Cancer Center Japan

<https://www.ncc.go.jp>

<https://www.facebook.com/nccgojp/>



中央病院 (築地キャンパス)

〒104-0045
東京都中央区築地5-1-1
Tel: 03-3542-2511(代)



東病院 (柏キャンパス)

〒277-8577
千葉県柏市柏の葉6-5-1
Tel: 04-7133-1111(代)



国立がん研究センター広報誌「日々歩」に関するご意見・ご感想は「広報企画室 日々歩」係までメールまたはFax、手紙にてお寄せください。

✉ ncc-admin@ncc.go.jp

FAX 03-3542-2545

〒104-0045 東京都中央区築地5-1-1 国立がん研究センター「広報企画室 日々歩」係

[企画制作] 国立がん研究センター企画戦略局広報企画室 [編集協力] 株式会社 毎日企画サービス

発行: 2019年10月